

## 第 48 回日本医療薬学会公開シンポジウム開催報告書

宮崎大学医学部附属病院薬剤部 有森 和彦

平成 24 年 11 月 11 日(日)に宮崎観光ホテルにおいて、「第 48 回日本医療薬学会公開シンポジウム」を日本医療薬学会主催、宮崎県病院薬剤師会および宮崎県薬剤師会後援のもと開催いたしました。当日は曇り空の中、県外からの参加もあり病院薬剤師、薬局薬剤師、薬学教員・薬学生を含め 154 名の参加者となりました。

本シンポジウム開催にあたって、学会本部よりご提示いただいたシンポジウムのテーマの中から「がん薬物療法と薬剤師の専門性」と「在宅医療を支える医療薬学」に着目し、がん薬物療法の開始から在宅医療への移行までの治療の流れを病院薬剤師と薬局薬剤師それぞれの視点での講演をいただき、薬業連携の問題点と今後の課題を討論すべく「がん薬物療法と薬剤師の役割～入院から在宅まで～」を本シンポジウムのテーマといたしました。

基調講演では明治薬科大学医療安全管理学の遠藤一司先生より、これからのがん化学療法の方角性やこれらを専門的に行う医療従事者の育成、また緩和ケアへの推進について御講演をいただき、国立がんセンターでの取り組みをご紹介いただきました。その中で外来治療におけるがん患者の説明や指導を行うために、病院と薬局が連携して、がん薬物療法の情報を共有し患者の治療にあたる必要性を説明していただきました。

シンポジウムでは、緩和ケアチームとして在宅での治療を視野に入れた緩和薬物療法に取り組みされている長崎大学病院の龍恵美先生から、実際の症例と緩和ケアの地域モデルを目指した「緩和ケア普及のための地域プロジェクト (OPTIM)」について、また、がん化学療法の情報共有に関して古賀総合病院の橘尚子先生より病院薬剤師が保険薬局へ情報提供を行う実際の取り組みについて説明していただきました。保険薬局の立場から、薬局セントラルファーマシー長嶺の天方奉子先生より在宅緩和医療において保険薬局、あるいは薬剤師が果たす役割について、フィジカルアセスメントを活用している現状と訪問の際に収集した情報を医療者、介護職も含めた多職種間で共有し、それぞれの職種が在宅療養の質の向上に活かしている現状を説明していただきました。

総合討論では、シンポジストの様々な取り組みについて各施設が直面している問題を解決すべく活発な意見交換がなされました。中でも外来処方箋に施行中の化学療法のレジメンを記載することで情報提供を行っている古賀総合病院の取り組みに関して、処方を受ける側の保険薬局に対しての意見が求められるなど、情報の共有に関して各施設の抱えている問題とその解決への方向性が議論されました。

本シンポジウムを開催し、がん化学療法の導入から在宅医療への移行にあたって多職種がチームとして取り組み、またそのチームがそれぞれの職種間で入れ替わりを行いながら“チームリレー”という形で常に患者を取り巻いていくことの重要性を教えてくださいました。その中で、職種間で共有すべき情報をどうやって入手し、伝達し、共有するか、そ

してそれぞれの具体的な方法を今後地域としてどのように取り組んでいくかが課題であると感じました。

最後に、シンポジウム開催にあたって御協力を頂いた宮崎県病院薬剤師会の関係各位、ご後援いた宮崎県薬剤師会、並びに日本医療薬学会事務局の方々、さらに講演を快く引き受けていただいた各演者の先生方に心より感謝申し上げます。